

『加耶の変遷から見た倭国の統一』

米田 喜彦

<目次>

- 第一章：加耶連合国家の誕生とその変遷
- 第二章：帥升の存在
- 第三章：饒速日尊の東征
- 第四章：血縁関係から見た『卑弥呼』
- 第五章：倭国大乱と邪馬台国
- 第六章：おわりに（「天孫降臨」外伝ほか）

第一章：加耶連合国家の誕生とその変遷

加耶は、AD42年に、首露王が生まれた事で6加耶が出来たそうです。生まれたばかりの赤ん坊が国を治められるはずはありません。そこで、「6加耶」の中から、「駕洛」と「大加耶」の国主を見ますと、加耶世主正見母主とあります。

さらに、「大加耶」を見ますと、「大加耶」の国主は、「加耶女君」が続いています。そうすると、6加耶というのは、ひとつの女国と5つの異父同母兄弟達の国だと見えてきます。

このパターンは、どこかに書いてありました。高句麗伝は、5族ですが、「大加耶（女国）」を「絶奴部」とすると、AD42年の加耶連合そのものが、高句麗の実体に見えてきます。

さて、そこで、各部族を（三国史記から）調べてみます。まず、①金氏です。帯素の従兄弟が掾那部にいます。朱蒙は、②羽（于）氏です。脱解王も于氏です。

赫居世は、③朴氏です。あと、④解氏もいます。「絶奴部」を⑤とすると、五族になりますが、6番目を探すとすると、6番目は、許氏になるかも知れません。

紀元37年に、楽浪〔国〕が滅んでいます。楽浪王の崔理は、（于氏）朱蒙の子で、百済の始祖の温祚王です。高句麗が、楽浪王を滅ぼしていますが、要は、高句麗が南下してきて、5族か6族で、小国家の連邦を作ったという事のようにです。

高句麗は、朱蒙の子（瑠璃明王）の子孫になりますが、実質的には、解氏が中心だったようです。次は、駕洛（金官加耶）を見ていきます。駕洛は、金海のことだろうと思います。そうすると、金官加耶と狗邪韓国は、ダブってしまいます。

そこで、次のように考えました。

- ① AD42 年、首露王が生まれた。(金官加耶)
- ② ②居登王(金氏・金官加耶)
 - (複数)不明
 - 助賁王(解氏・狗邪韓国)(:230~)
 - 味鄒王(金氏・金官加耶)(:262~)
 - 天日槍の弟(金氏・金官加耶)

三国史記・列伝・金庾信を勝手に解釈すると、金庾信は、

- ① 首露王の男系子孫ですが、居登王ではなく、居登王の弟で王妃の姓を名乗った、許婁葛文王の子孫になります。ですから、味鄒王か「天日槍の弟」の9世の孫が金仇亥で、12世の孫が金庾信だろうと、推測しています。

もう一度、駕洛(金海)の話にもどりますが、「狗邪韓国」を、「解氏」の国だとすると、金氏がやって来る前の半島南部は、「解氏」が治めていたと考えられます。後漢書夫余国伝に出てくる「狗加」に相当します。ですから、「狗奴国」は、「狗加」の支配している「奴国」になります。

つまり、西日本全体(つまり、銅鐸文化圏以外の銅剣文化圏)は、「解氏」による「狗奴国」であったことが想像されます。そして、AD42年に加耶連合(女王国)が出来た時に、九州北部も、加耶連合(女王国)の一部になったのではないかと、推測するわけです。そう考えると、狗奴国が、女王国の東にあたり(後漢書倭伝)、女王国の南にあたり、(魏書倭人伝)という謎が解けます。

ここで、各部族(族長)の流れを、ウィキペディアや三国史記などから調べてみます。

- ①金氏は、帯素の従兄弟が玄菟郡の掾那部に属しています。夫余王の帯素が亡くなった後も、金氏として、生き残っていたようです。

- ② 羽(于)氏です。朱蒙は、もしかすると、許氏かもしれません。紀元前1世紀に、突然現れて、馬韓地方を治めていきます。また、隋の時代の宇文文化及(うぶん かきゅう)は、隋末の混乱期に独立して皇帝を僭称し、「許」を建国していることから、「宇文氏」も、「羽(于)氏」=「宇文氏」=「許氏」ではないかと、推測しています。③朴氏です。赫居世(BC69頃生)もと倭人で半島にやって来た。(朴氏・瓢公)ここで、「蘇」について、少し書きます。

※伯孫の29世孫慶は新羅真徳女王の時、最高官職である上大等となった。この時代、新羅の王族には、金氏と朴氏しかいませんので、この「蘇氏」は、「朴氏」の可能性が高いです。

もちろん、小野妹子(蘇因高)も、「蘇我」も、「蘇」の一族と考えられます「神統譜・中臣氏」によると、「天御中主神」を初代(1代目)とすると、30代目は、「藤原鎌足(614年生)」になります。ですので伯孫の29世孫「慶」は、「藤原鎌足」又は、「鎌足の父」の可能性が考えられます。※BC209年豊の69世孫蘇伯孫が辰韓を建国したと言う。「不死の妙薬を求めて紀元前219年に出航した徐福の船は…。」BC209年だと「蘇伯孫」は、徐福の船に、乗っていた可能性が高いと思います。徐福は方士ですから、徐福の一行の中には、国を建てて、王になった人たちもいたと思われます。

ここからは、私の想像ですが、赫居世は、「もと倭人」ですから、「朴氏」は、「解氏」の「狗」と一緒に、西日本の銅剣文化圏と、半島南部に広く住んでいたと考えられます。※次に多婆那国の話をします。新羅の脱解王は、多婆那国で生まれています。この多婆那国は、丹波のことだろうと考えています。

そうすると、この羽（于）氏は、近畿東海の銅鐸文化圏を支配していた一族だろうと考えられます。ネットで調べてみると、金氏許婁葛文王は、多婆那国の女の人と結婚して、男と女の双子が136年頃に生まれています。男子は又日（明臨答夫）で、掾那部で玄菟郡の皂衣になっています。

また、初代の国相でもあります。女子の又韓は、150年代に、『初代卑弥呼』を生んでいます。この『初代卑弥呼』は、独身で、234年に亡くなっています。初代の卑弥呼が、どこで亡くなったのかは不明ですが、豊前風土記に出てくる、豊前国の宮処の郡ではないか、と、想像しています。

PS：新羅の脱解王は、即位の年が57年で、年は、62歳になっています。これでは、BC5年生になってしまいます。そこで、次のように独自に解釈をしました。

- ・脱解王の祖母（BC5年生・世主女君）
- ・脱解王の父（AD10年頃生）
- ・脱解王の母（AD33年生・夫余人）
- ・脱解王（AD57年頃生・多婆那国で誕生）

Q：三国史記は、成立年代も遅く、間違いが多いので、古代史の史料としては使えないのではないかな？

A：三国史記は、建前としては、国の歴史になっていますが、実際には、7世紀頃の王族の先祖の歴史です。栄枯盛衰の中で、7世紀まで生き残ってきた先祖たちの歴史として見ると、案外正確なことが見えてきます。新羅も高句麗も、「加耶女君」を「絶奴部」とすると、5（6）族の族長の誰かが、それぞれの国の王になって（割り当てられて）いる事が見えてきます。三国史記のトリックは、母または、祖母を世主（女君・太后）として、即位の時の年齢は、彼女達の年齢を使うことがよく見られます。また、別の処では、王の即位の年が、実は生まれた年であるようなトリックも使っています。

三つ目のトリックは、縦系図の時に、母系（女系）でつないでいる時に、例えば、①朴氏男—②朴氏女—③金氏女—④朴氏男_と、系図があった時に、（金氏を抜いて）①朴氏男—②朴氏女—④朴氏男_____のように、平気で表記をしていることがありそうなのです。

これをされると、系図的には1・2世代抜けた系図が出来上がります。系図を書いていると、世代が抜けていて困ったことがよくありました。

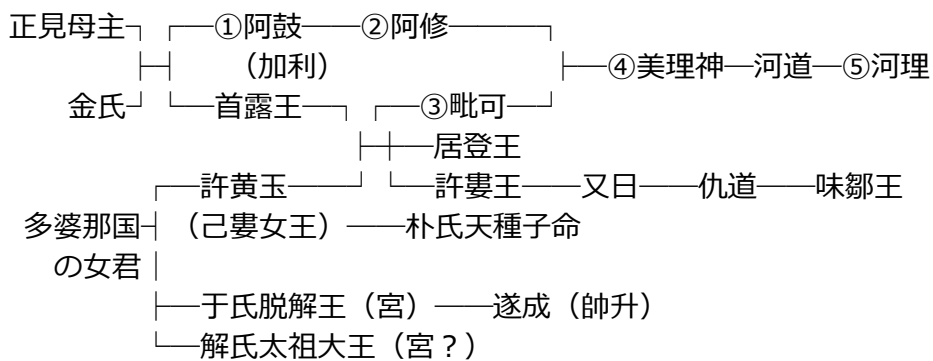
四つ目のトリックは5世紀以降の百済の王の大半は、男王ではなくて、女王だった事です。時には、女王の王配が王になっていることもあります。

五つ目は、高句麗本紀で、王の名前に「川」が付いている王は、「女王」でした。そして、高句麗の女王の夫は、新羅の王だったりします。このように、三国史記を史料として使うためには、年代や続柄の見直し作業が必要になります。

では、三国史記と日本書紀とでは、どちらが正確でしょうか。今まで、10年以上系図を書き（直し）続けてきた経験からいいますと、三国史記の方がかなり正確です。というのも、三国史記は、王族たちに都合が悪い事は、あまり書かれていないのです。ところが日本書紀（古事記）になりますと、異父同母兄弟は、ひとりの父の子にまとめられて表記されていたり、色々なエピソードが、時代を超えて、別の人物のお話になっていたり、架空の人物が登場したり、ひとりの人物が、たくさん名前をもっていて、死んだと思ったら別の名前で登場してきたり、女の人が、男のふりをして登場していたり・・・。

日本書紀（古事記）から、実年代を特定していく作業は、ものすごく大変でいつ終わるか分からないくらいです。記紀の解説に比べたら、三国史記は、（手がかりは少ないですが）正直で、正確で、解説は（トリックもありますが）楽な方でした。

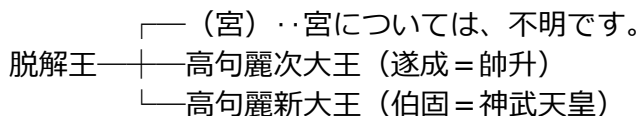
（紀元1世紀頃の系図：女系の変遷）



PS：加利と婆娑王の間に生まれた子、居利は（158年頃生）朴堤上の先祖に当たります。

第二章：帥升の存在

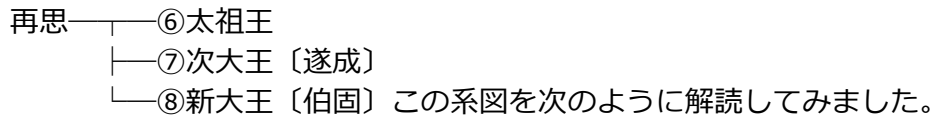
加耶連合国家の誕生とほぼ同じ頃、多婆那国にも、大きな変化が現れます。33年生まれの扶余人（女）が、解氏太祖大王や于氏脱解王・己婁女王（許黄玉）を多婆那国で生みます。太祖大王は、47年生ですから、異父弟の脱解王は、50年頃生だろうと思います。この33年生まれの扶余人は、53年から、多婆那国の女王（太后）として、君臨しています。太祖大王は加耶を支配し、脱解王は、倭国を支配していて、後に、脱解王の息子の帥升が107年に後漢に朝貢をしています。



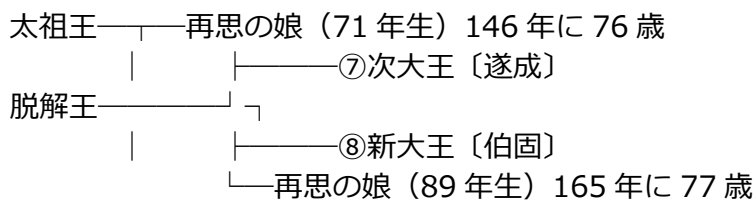
PS：日本書紀は、10代の（朴氏）崇神天皇を初代にしたかったようですが、帥升に敬意を表して、于氏で高句麗の新大王を、初代天皇にしたようです。ところが、エピソードが足りないとか、藤原不比等が、自分たちの先祖（朴氏）を神武天皇にしようとしたらしいとか、とにかく、時代も場所も氏も違う複数の人物をモデルとした伝承が、天照大神から崇神天皇にかけて、混ざっているものですから、崇神天皇以前についての記紀の記述は、鵜呑みには、出来ません。この時代の解説には、（私は）中臣氏の系図を「時代の物差し」に使っています。

Q：高句麗本記の年代は、信用出来ますか？

A：朱蒙は于氏です。7世紀の高句麗王は、金氏です。高句麗王の系図を見ると、朱蒙から7世紀の王まで、男系で繋がっています。つまり、男系で繋がらないものを、無理やり繋げているのです。それから、太后の代替りを意識すると、即位の時の年齢も納得がいきます。没年の享年は、生き続けていたと考えた時の年齢です。（倍暦などは、使っていませんでした。）



太祖王（解氏再思⑥・47年生）としました（注：太祖王と脱解王は、同母兄弟です。）
 今まで、解説不能だった系図が、当たり前の系図に見えてきました。
 男系相続にこだわらなければ系図の解説は、案外簡単なのです。

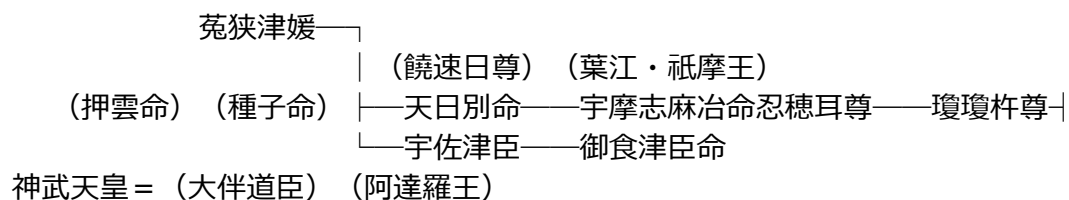


第三章：饒速日尊の東征

神武天皇は、本来（男王としては）、于氏伯固でした。ところが、7世紀の朴氏と金氏の王族たちが、自分たちの先祖（違う時代の人物たち）を神代の人物たちとして、日本書紀に付け加えていきました。このため、饒速日尊と神武天皇が、同じ時代に生きているという摩訶不思議な物語が、出来上がりました。この時代の解説には、（私は）中臣氏の系図を「時代の物差し」に使っています。ですから、饒速日尊の東征についても、中臣氏の系図上の人物を「時代の物差し」として、使っていこうと思います。伯固の母は、89年生ですから、伯固は、108年±10年頃に生まれています。だいたいこんなものです。神武天皇紀では、太歳は、甲寅ですから、114年になります。この114年に何をしているかということ、中臣氏の遠祖の天種子命が、筑紫の菟狭で、菟狭津媛を妻に娶ったことが書かれています。ちなみに、天種子命は、天御中主の11世の孫になります。風土記には、天御中主の12世の孫の、天日別命が伊勢の国を平定したことになっています。そして、天日別命と同世代と思われる大部の日臣（大伴道臣命）がいます。

天種子命を瓊瓊杵尊とした時の系図が下記です。

（彦火火出見＝神武天皇にした一例です。）（瓊瓊杵尊のモデルは、数人います。）



※誰を瓊瓊杵尊に特定するかで、天孫降臨の場所は、変わってきますが、天種子命=瓊瓊杵尊とすると、天孫降臨の場所は、九州北部になります。まとめてみますと、高句麗新大王（伯固）を神武天皇とすると、108年±10年頃に生まれています。中臣氏の宇佐津臣命を神武天皇とすると、133年頃生になります。

天日別命は、115年頃生で、饒速日尊になりますから、天日別命が、伊勢の国を平定したのは、36歳頃として150年頃だろうと推測しています。そして宇佐津臣命の息子の阿達羅王は、154年頃に生まれています。新羅本紀は、阿達羅王の生年を、即位の年に誤魔化して使っています。年代の誤魔化し方が上手だなあと、感心します。

第四章：血縁関係から見た『卑弥呼』

高句麗本紀や新羅本紀を読んで、両親を入れて系図に作っていくと、この人物は女で、しかも子どもがいなくて、という人物が浮かび上がってきます。古事記で云うと、「日子八井命」という人物です。新羅本紀に出てくる伐休王と、高句麗本紀に出てくる抜奇が、同一人物であることに気が付いたからです。系図で表します。（抜奇=手研耳命です。）

許婁葛文王 ─┬─
├─又韓（136年頃生）多婆那の娘──┬─┤
└─故国川王（179年即位）新大王（伯固）──┬─┘（156年頃生・卑弥呼）
（仇鄒角干）

故国川王は、227年に退位していますが、実際には、234に太后の于氏として亡くなっています。179年から234年まで、56年間も王后・太后として君臨していた訳ですから、まさに、雲の上の存在だったことだろうと思います。しかもこの卑弥呼は、アンチ公孫氏の立場ですから、公孫氏の楽浪郡や帯方郡から見ると、やっかいな存在だったと思います。

卑弥呼は、独身ですから、国王と后を指名しています。公孫氏と外交的には争いませんから、公孫氏とうまく出来る国王を指名しています。それが、新羅助賁王（247年没）と、高句麗東川王（阿爾兮夫人・248年没）です。この東川王は、倭人伝の卑弥呼の没年とピッタリです。

そうすると、狗奴国の男王には、新羅の沾解王が、うまく当てはまります。この沾解王については、記録が一切残っていません。新羅の助賁王は、狗邪韓国の王として君臨していますが、247年に亡くなっています。玄菟郡の太守の王頎は、毋丘儉の下で、將軍として参加しています。掾那部の金氏も当然王頎に従って、南下してきます。王頎が帯方郡太守になった時には、塞曹掾史張政として倭国に使者として行っています。その後、王頎は、西晋の武帝の時に、汝南太守を務めています。その後、帯方郡の太守には、張氏がなっています。

私は、張氏=金氏とみています。味鄒王が帯方郡の太守になったかどうかは不明ですが、少なくとも、味鄒王以降、加耶（金海）は金官加耶として、金氏の治める国になったことは、ほぼ事実だろうと思います。

そして、塞曹掾史張政は味鄒王で、その子どもが、天日槍だろうというのが、私の主張になります。張政は、265年頃に一度、半島に戻ってしま話は少し跳びますが、垂仁天皇紀3年に、天日槍が帰化しています。垂仁天皇の在位は、99年になっていますが、これは不可能です。

ですが、これを、天日槍から神功皇后までの年代記としてみると、99年は、十分に現実味のある年代になります。垂仁天皇紀元年を、太歳の干支（壬辰）から見ると、272年ですか

ら、天日槍の帰化は、274年になります。神功皇后の立后は、272年ですから、約100年前になりますから、年代的には、ピッタリです。そうすると、本当の垂仁天皇の即位は、何年かということになります。ですから、干支（壬辰）から考えてみて、332年だろうということになります。

第五章：倭国大乱と邪馬台国

倭国の大乱は、桓帝・靈帝の治世（147年～189年）に起きています。この期間に何があったかを見ると、次のようになります。

㊦：天日別が、伊勢を平定した。150年頃。

㊧：神武（伯固）の子が誕生。156年頃生。

㊨：遂成（次大王）が弑虐された。165年。

㊩：卑弥呼側の阿達羅王が、死去。184年。神武天皇〔伯固〕は、110年頃に生まれています。

天種子の婚姻を114年（甲寅）とした上で、古事記の滞在期間を使うと、安芸の国に7年間（115～121年）、吉備の国に8年間（122～129年）になります。手研耳命は、130年頃に生まれています。

そうしますと、手研耳命（抜奇）は、吉備で生まれたのか、大和で生まれたのか、微妙なところになります。手研耳命に当たる伐休王（抜奇）は、196年に亡くなっていますから、これで、倭国の大乱も落ち着いたと思います。

「倭国大乱」とは、少し離れますが、各地域に「〇〇女君」がいたと思われます。そして、「女君」である限り、女系の断絶はかなりの頻度で起きてきます。ということで、女系の断絶を調べてみます。

㊦（加耶世主）正見母主—阿修（男）

㊧（多婆那国）許黄玉—毗可—美理神—河道—河理—男
（葛文王摩帝）—夫余の加利（河理）—男

㊨（多婆那国）沙乙那—又韓—卑弥呼（234年没）

㊩（許婁葛文王の娘）史省夫人—婁生（川派媛）—男子

㊪（光明夫人と命元夫人は、助賁王の妻）

（189年生）（209年生）（224年生）

┌—天女—阿爾兮夫人—光明夫人—男玉帽夫人—┐

|（248年没）（270年没）

└—天女の妹—奈是理姫（妹）—命元夫人—台与

└—伊世理姫（姉）—（不明）

このように見ていくと、（加耶世主）正見母主の時代に作られた加耶は、許黄玉の兄弟や許黄玉の子孫に受け継がれ、その子孫達は嫁を求めて、夫余・丹波・九州の「王女」との間に子孫を作っていた。

その結果、親類になった近畿（多婆那国）と九州（倭国）と半島（三韓）は、高句麗の五族の形を受け継いで、6世紀頃まで、その形を残した。阿爾兮夫人・光明夫人が住んでいたと思われる「邪馬台国」は、女系の断絶によって、廃れていったと思います。そして、狗奴国を挟んで、その後、命元夫人・台与が住む「大和」が、繁栄したのだろうと、思います。

第六章：おわりに（「天孫降臨」外伝ほか）

『風土記』に書かれている、「瓊瓊杵尊」に関わる流れを調べてみます。

- ・豊前国：むかし天孫が宮処（みやこ）から日向の旧都に天降った。おそらく天照大神の神京（みやこ）である。
- ・日向の国：瓊瓊杵尊が日向の高千穂の二上の峰に天降りなされた。
- ・薩摩国：土地の娘を召して、二人の男子をおもうけになった、云々。
- ・常陸国：珠売美万命（皇孫瓊瓊杵命）が天からお降りになったとき、御服（みぞ）を織るために従って降った神、み名は綺日女命（かむはたひめのみこと）は、もと筑紫の日向の二所の峰より、三野（美濃）の国においでになった。後、崇神天皇のみ世になって、多豆命は、三野を去って久慈に移り、云々。

ここまでは、『風土記』から抜き書きをしました。ここで問題にするのは、「綺日女命」です。というのは、垂仁天皇紀に、「綺戸辺（かにはたとべ）」が出てきます。私は、この二人は、同一人物だろうと思っています。

垂仁天皇紀に出てくる人物が、崇神天皇の時代には、本人かその娘が、美濃から久慈に移る訳ですから、奇妙な話ではありますが、これは、徳川家康の息子（御三家）が、家光の時代に、結婚するような話と同じですから、同一人物の可能性は、十分にあります。

そうしますと、珠売美万命（皇孫）による天孫降臨の話は、卑弥呼のあとの時代に起こった、ある人物の話（エピソード）を神武天皇よりも前の人物の話に、すり替えている可能性が高いと考えられます。最後は、神無月の話です。神無月（かなづき、かみなしづき）は、日本における旧暦 10 月の異称である。まずは、三国志高句麗伝の記述からです。（高句麗では）十月に天を祭る。国中で大集会をする。これを東盟という。その公式の衣服は、みな錦織や繡のある絹織物で、金銀で飾りたてる。……。

国の東部に大きな洞穴があり、隧穴といっている。十月には国中から多勢の人々が集まり、隧（穴の）神を迎え、国の東部の河のほとりに還って、この神を祭る。云々。ここまでは三国志高句麗伝の抜き書きでした。さて、高句麗の祭りとお出雲の話は、よく似ています。似ているというよりも、同じです。

東盟という収穫祭があって、その王を東明聖王とすると、紀元前 37 年に、半島南部に進出したこととなります。もしかすると、お出雲への進出も、この紀元前 37 年頃かもしれません。または、加耶の建国にあたる、紀元 42 年頃かもしれません。文献からの想像です。

二番目ですが、風土記の中に、次のような記述があります。近江の国の伊香（いかご）の郡で、水浴をしている天の八女の衣服（天羽衣）を伊香刀美（中臣氏の先祖の伊賀津臣命）が盗んだので、天女の妹が残って伊香刀美と結婚して子どもを生んだ。天羽衣は、どう見ても絹織物です。

伊香刀美は、中臣氏の先祖ですから、大体の年代が計算出来ます。この年代を計算しますと、大体、この結婚は、210 年頃になります。

つまり、近畿地方は高句麗の支配下にあったと考えられます。加耶の連合国家そのものが高句麗ですから、近畿地方も加耶の一部に取り込まれたことになります。高句麗が拡大したというよりも、北からの圧迫を受けた高句麗が南下してきて、近畿（多婆那国）や九州（倭国）と合体して、加耶の連合国家に変質したと考えています。

そして、楽浪郡などがなくなり、6世紀に入ると、加耶を母体とする韓三国と倭国が、それぞれ（昔から）別々の国であったかのごとく振る舞うようになった。（そして、お互いに知らん顔をして独自の国史を作り始めた。） 以上、加耶の変遷から見た倭国でした。



倭人伝の時代（3世紀）



後漢の時代（1～2世紀）



紀元前